尋常小學

國語讀本

卷三

文部省

須磨藏書

T1A4
1H8
To46

教科書文庫
4
810
31-1928
25000
32326

41364

教科書文庫
4
810
31-1928
2500032326

東京高等師範學校圖書之印

尋常小學

國語讀本

卷三

文部省

登録番号
32326
分類 375.9 M

須磨藏書

広島大学図書
2500032326

モクロク

一　イマハ……一
二　ハヤオキ……二
三　ヒヨコ……五
四　うちの子ねこ……十
五　お花……十二
六　ゆびのな……十四
七　かんがへもの……十七
八　わらびとり……二十
九　竹の子……二十五
十　きやうだい……二十八
十一　五一ぢいさん……三十一
十二　右ト左……三十五
十三　まはりつこ……三十七
十四　うらしま太郎……三十九
十五　四方……四十六
十六　私ノ村……四十八
十七　一口ばなし……五十一
十八　をののたうふう……五十四
十九　セミ……五十七
二十　ささ舟……六十
二十一　水デツパウ……六十五
二十二　虫ぼし……七十
二十三　カウモリ……七十三
二十四　十五や……七十七
二十五　ふじの山……八十
二十六　はごろも……八十二

さくら　はち

一　イマハ

イマハ　サクラヤナ〃
タネノ　花ザカリデス。
テフテフハ　花カラ花
ヘ　ヒラヒラト　マヒ、ハチ
ハ　セツセト　ミツヲアツメテ　ヰマス。
ミチバタニハ　スミレヤ

ひばり

タンポポガサイテキルシ、ムギ畠ノ
上ニハアサハヤクカラヒバリガサヘヅツテキマス。
カゼモアタタカデ、オモテデアソブ
ニハ一バンヨイトキデス。
ニハヤオキ

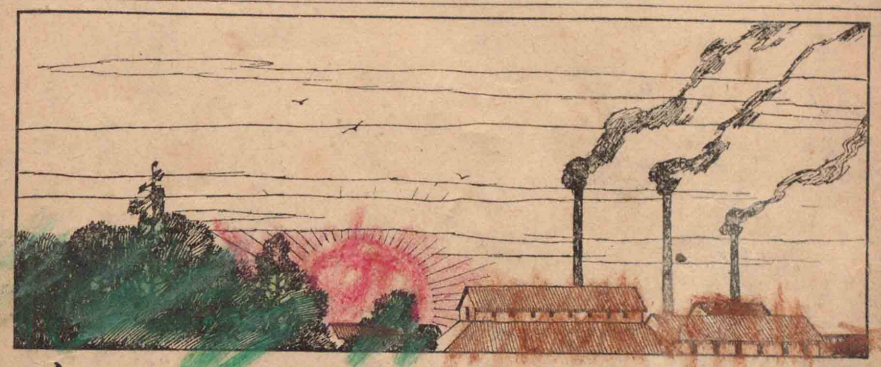
こうば

コウバノキテキガナツテキマス。マ
ダウスグラウゴザイマスガ、ケサコソ

からす

ニイサンヨリサキニオキテミヨウト
オモツテ、ソツトネドコヲ出マシタ。
トヲアケルト、ムカフノソラガウ
スアカクナツテキマス。カラスガ二三
バナキナガラトンデイキマス。
「ア、日ガ出ハジメタ。キレイダ。ニイ
サン、ニイサン。」
「オウイ」トキドバタデ、ニイサンノコエ

えんとつ



ガ シマス。

又 一シキリ キテキ ガ ナツニ

テ、エントツ カラ ムクムクト

マツクロナ ケムリ ガ 出マス。

コウバ デハ モウ シゴト ガ

ハジマツテ キル ラシイ。

ハヤク カホ ヲ アラツテ、ニ

イサント 一シヨニ オサラヒ

たまご

ヲ シマセウ。

三 ヒヨコ

二三日 マヘ カラ メンドリ ガ スニツ

キマシタ。ケサ オカアサン ガ タマゴ ヲ

入レテ オヤリニ ナリマシタ。メンドリ ハ

ヘンナ コエ ヲ タテテ キマシタ ガ、見

テ キル ウチ ニ、タマゴ ヲ ハラノ下

ニ ダイテ シマヒマシタ。

ヒヨコ

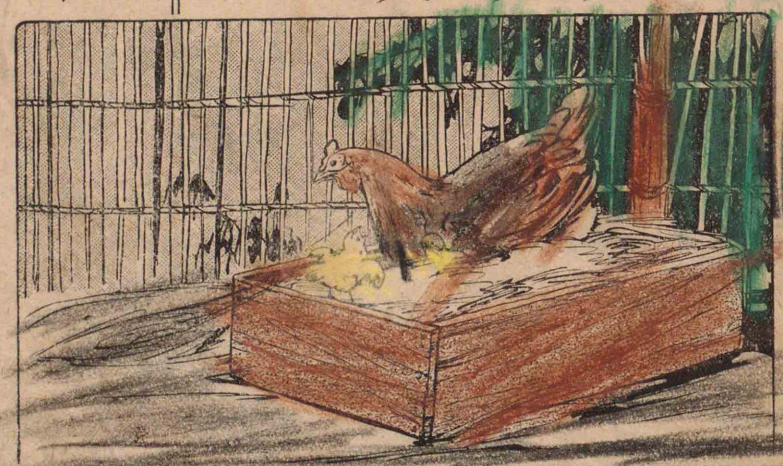
二十日

エヤ水ヲヤツテモ、見ムキモシ
ナイデ、タマゴヲアタタメテヰマス。
オカアサンニ、
「イツヒヨコガ出マスカ。」
トキキマスト、
「二十日バカリタツト出マス。」
トオツシヤイマシタ。
アルアサ、オカアサンガ

おやどり

はね

「ヒヨコガカヘツタ。」
トオツシヤツタノデ、見
ニイキマスト、オヤドリ
ノムネノトコロカラ、
ヒヨコガ小サナアタマ
ヲ出シテ、ピヨピヨトナ
イテヰマシタ。ハネノ下
ニモ二三バヰルヤウデシタ。



ヒヨコ ガ ナク ト、オヤドリ ハ オハナ
シ デモ スル ヤウ ニ、ココココ ト イ
ツテ ヰマシタ。

二三日 タツト、オヤドリ ハ ヒヨコ ヲ
ニハ へ ツレ出シマシタ。ヒヨコ ハ ミン
ナ デ 十パ デス。
ヒヨコ ハ ホソイ アシ デ、チヨコチヨコ
アルキマス。タベモノ デモ サガス ノ デ

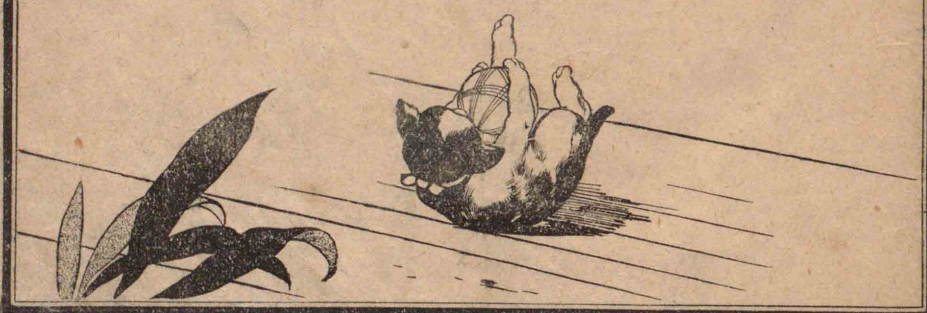
セウ、キイロイ クチバシ デ、トキドキ チ
メン ヲ ツツキマス。
ナノハ ヤ コ米 ヲ ヤル ト、ヒヨコ
ハ ミンナ ヨツテ キテ タベマス。オヤド
リ ハ ナンニ モ タベナイデ、コ コ コ
ト イヒ ナガラ、ソノ ヘン ヲ 見マハリ
マス。
そば
ネコ デモ ソバ へ クル ト、オヤドリ ハ

オコツテ ケヲ サカダテマス。
私ハ ガクカウ カラ カヘツテ、ヒヨコヲ
見ル ノガ タノシミ デス。

四 うちの 子ねこ

うちの 子ねこ は
かはいい 子ねこ、
くびの こすず を
ちりちり ならし、

すそに からまり、
たもと に すがる。
うちの 子ねこ は
かはい 子ねこ、
くびの こすず を
ちりちり ならし、
まり と ざれて は
えん から おちる。



へ き ろ

五 お花

お花は がくかうから かへると、おつかひに いつたり、には をはいたりして、おかあさんの おてつだひ をします。あかちやんが なき出すと、すぐ そばへよつて、

「ねんねん ころりよ、
おころりよ。」

ゑ せ

ばうや は よい 子 だ、
ねんねしな。」

と かはいらしい こゑ で、子もりうた を うたひます。それ でも まだ あかちやん が なく とき には、

「おかあさん、あかちやん に おちち を のませて ちやうだい。」

ゆふ　二　る

かう いつて、だつこ を して おかあさん
の ところ へ つれて いきます。
お花 は ことし 九つ です。

六 ゆびの な

ゆふはん が すんだ あと で、おぢいさん
が 二郎 に たづねました。
「おまへ はて の ゆびの な を しつて ゐます か。」

ほ

「しつて ゐます。一ばん ふとい のが おやゆび で、一ばん ほそい のが こゆびです。」
「それ から。」
「それ から、一ばん ながい のが 中ゆびで、中ゆび と おやゆび の あひだに ある のが 人さしゆび、中ゆび と こゆび の あひだ に ある のが く

わ

すりゆび です。」

「さう です。それ では あし の ゆびの な を しつて ゐます か。」

「おなじ こと でせう。」

「まあ、いつて ごらん。」

「おやゆび、人さしゆび。」

おぢいさん は わらひ ながら、

「二郎、おまへ は その ゆび で 人を

さします か。あし の ゆび は、おやゆび と こゆび の ほか には ながな い の です。」

と をしへて やりました。

七 かんがへもの

「この はこ の 中 に、おもしろい 人 が ゐます。あてて ごらん なさい。」

「その はこ を かして ください。」

「はい。」

「ふつても　ようございますか。」

「はい。」

「たいそう　かるうございますね。この人は　どんな　いろの　きものを　きてゐますか。」

「あかい　きものを　きてゐます。」

「それ　では　をんな　でせう。」

「いいえ。」

「それ　では　をとこの子　ですか。」

「いいえ。としより　です。」

「どうも　こまりました。どんな　かほを　してゐますか。」

「かほぢゆう　ひげだらけ　です。」

「それ　では　て　も　あしも　ない　でせう。」

「はい。」

「わかりました。だるま　さん　です。」

八　わらびとり

小　小二郎は正一とうらの山へわらびをとりにいきました。よけいにとつたはうがかちだといつて、

二人　二人は まつやつつじの あひだを あちらこちらへくぐつて とりました。

太　太くてやはらかなわらびがたくさんはえてゐました。

む　上　二人がむちゆうになつてとつてゐますと、下のはうからかさかさいはせてかけ上つてくるものがあります。

二人がびつくりして見てゐますと、それは小二郎のうち

ぬ　み　め

の　いぬ　でした。犬は　はな　を　くんくん
いはせ、を　を　やたらに　ふつて、小二郎
の　そば　へ　よつて　きました。それ　から
その　へん　を　むやみに　かけまはりました。
た。
又　とりはじめて、二人　は　たくさん　とつ
て　から　くらべて　みました。どちらも　た
いてい　おなじ　くらゐ　で、かちまけ　は　あ

りません　でした。
その　とき　正一　の　おぢいさん　が、たき
ぎ　を　うま　に　つけて　そこ　へ　きまし
た。二人　は　よろこんで、おぢいさん　に　つ
いて　かへりました。
小二郎　が　うち　へ　かへつて　みます　と、
犬　は　もう　とつくに　かへつて　ゐて、か
けて　きて　とびつきました。

あいうえお
かきくけこ
さしすせそ
たちつてと
なにぬねの
はひふへほ
まみむめも
やいゆえよ

がぎぐげご
ざじずぜぞ
だぢづでど
ばびぶべぼ
ぱぴぷぺぽ

雨

らりるれろ
わゐうゑを
ん

九　竹の子

この　二三日の　雨で、竹の子が　こんなに　出ました。むぐらもち　でも　とほつたやうに、土が　ところどころ　もち上つてゐます。そこから　竹の子が　出るの

高

石

です。

この　あひだ　かきねの　そば　へ　出た　の

は、もう　私　の　せい　より　高く　なりま

した。かう　のびて　は　とても　たべられま

せん。

石がき　の　下　へ　出た　の　は、かはが

おちはじめて、竹　に　なりかかつて　ゐます。

あれ　は　いまに　さを竹　に　でも　なる　の

方

でせう。

又　あそこ　ここ　に　わら　を　むすびつけ

て　ある　の　は、ほり

とらない　しるし　で、の

ばして　おや竹　に　す

るの　だ　さう

です。むかふ　の

方　に、二本　な

らんで　ゐる　ほそい　竹の子　は、いまに　竹に　なつたら、おぢいさん　に、あれ　で　竹うま　を　こしらへて　いただく　つもりです。

十　きやうだい

ゆふべ　の　雨　で　くさ　や　木　の
みどり　いろ　ます　なつ　の　あさ、
つつみ　かかへて　がくかう　へ

つれだち　いそぐ　あね　おとと。

足　すべらせて　こけかかる
おとと　を　かばふ　あね　の　うで。
かばふ　はずみ　に　あね　は　また
足だ　の　はなを　ふつつりと。

「ねえさん　これ　を　あげます。」と、

手

こしに はさんだ 手ぬぐひの
はし ひきさいて さし出せば、
「正さん これは ありがたう。」

あねは 手ばやく を を たてて、
小川の 水で 手を あらひ、
「さ、いきませう。」と きやうだいは
がくかう さして いそぎゆく。

村車

十一 五一ぢいさん

村はづれに 水車や が あります。村の
人は 五一車と よんで ゐます。五一ぢ
いさん が その 水車や の ばん を して
ゐる から です。
五一ぢいさん は おもしろい ぢいさん で
す。「からす の なかない 日 は あつて
も、五一ぢいさん が うたはない 日 は な

長

い。」と　村の　人から　いはれる　ほど、い
つも　きげん　よく　うた　を　うたふ　ぢい
さん　です。

長い　はんてん　を　きて、みじかい　ももひ
き　を　はいて、こぬかだらけ　に　なつて　は
たらく　ぢいさん　です。

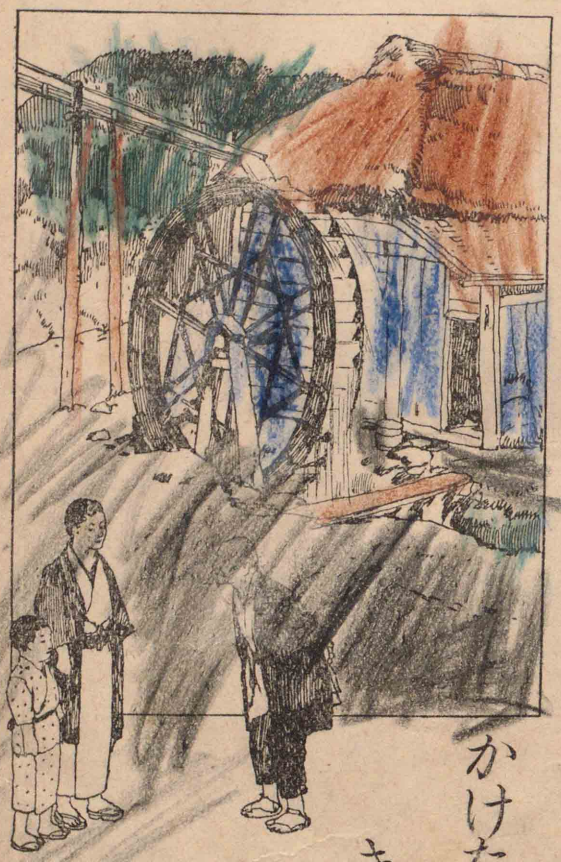
ざぶざぶ　おちる　水　の　おと、とんとん
ひびく　きね　の　おと、その　にぎやかな

中　から、

「しごと　なされ　よ、

きりきりしやんと、

かけた　たすき　の
きれる　ほど。」
五一ぢいさ
ん　の　う
たふ　こゑ



道

が　きこえます。

いつか　うち　の　おとうさん　が　道　で、

『いつも　おたつしやな　ことで。』

と　おつしやつたら、五一ぢいさん　は

『もう　すつかり　よわりまして。』

と　いつて、大きな　手　で　あたま　を　な

でました。

五一ぢいさん　は　ことし　六十九　だ　さう

右　左

です。

十二　右　ト　左

ゴハン　ヲ　タベル　トキ　ニ、ハシ　ヲ　モ

ツ　方　ノ　手　ハ　右　デ、チヤワン　ヲ　モ

ツ　方　ノ　手　ハ　左　デス。

足　ニモ　右左　ガ　アリ、目　ニモ　耳　ニ

モ　右左　ガ　アリマス。キモノ　ノ　ソデ　ニ

モ、タビ　ニモ、手ブクロ　ニモ、クツ　ニモ

右左ガアリマス。

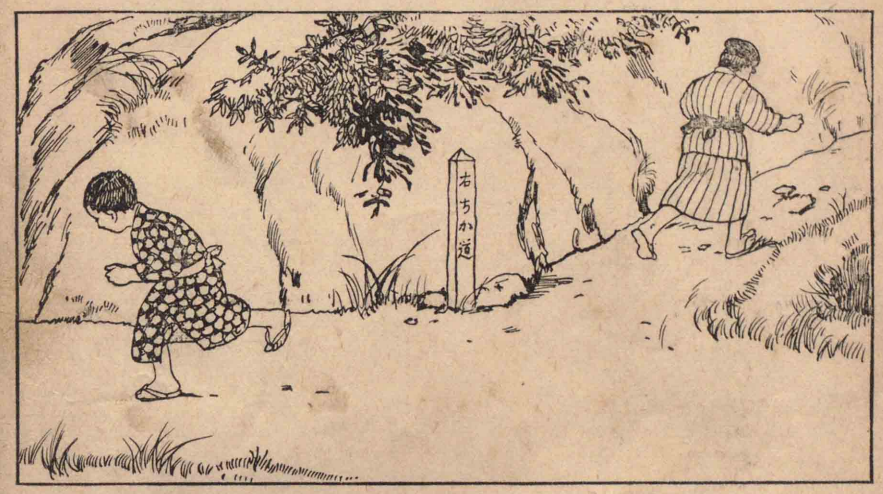
タイサウノトキアルキ出スノハ左ノ足デ、オケイコノトキアゲルノハ右ノ手デス。

又オモイモノヲ右ノ手ニ持ツトキニハ、カラダヲ左ノ方ヘマゲ、左ノ手ニオモイモノヲ持ツトキニハ、カラダヲ右ノ方ヘマゲマス。

ソレカラ、道ヲアルクトキニハ、左ガハヲ通ルノガヨイコトニナツテヰマス。

十三　まはりつこ

小二郎「又わかれ道のところへきました。まはりつこをしてみませうか。」



正一「して　みませう。ぼくは　右の　ちか道の　方を　いつて　みます。」

小二郎「それ　では　ぼくは　左の　本道を　通ります。」

二人は　かけ足で　まはりつこ　を　しました。ちか道の　方は、道が　こはれて　ゐたり、石が　出てゐたり　しました。それで　とほい　本道を　まはつた　小二郎の　方が、正一よりも　かへつて　さきに　つきました。

十四　うらしま太郎

むかし　うらしま太郎　といふ　人が　あ

りました。

海

ある　日　はま　を　通る
と、子ども　が　大ぜい　で
かめ　を　つかまへて、お
もちや　に　して　ゐます。
うらしま　は　かはい　さう
に　おもつて、子ども　か
ら　その　かめ　を　かつて、
海　へ　はなして　やりま

舟

上

した。
それ　から　二三日　たつて、うらしま　が　舟
に　のつて　つり　を　して　ゐます　と、大
きな　かめ　が　出て　きて、
「うらしま　さん、この　あひだ　は　ありが
たう　ございました。その　おれい　に　り
ゆうぐう　へ　つれて　いつて　上げませう。
私　の　せ中　へ　おのり　なさい。」

毎

といひました。うらしまがよろこんでかめにのると、かめはだんだん海の中へはいつて いつて、まもなくりゆうぐうへつきました。

りゅうぐうのおとひめはうらしまこんで、毎日いろいろなごち

そうをしたり、さまざまなあそびをして見せたりしました。

うらしまはおもしろがつて、うちへかへるのもわすれてゐましたが、そのう

玉箱

ち　に　かへりたく　なつて、おとひめ　に
「いろいろ　おせわ　に　なりました。あまり
長く　なります　から、もう　おいとま　に
いたしませう。」
と　いひました。おとひめ　は
「それ　は　まことに　おなごりをしい　こと
で　ございます。それ　では　この　玉手箱
を　上げます。どんな　こと　が　あつても、

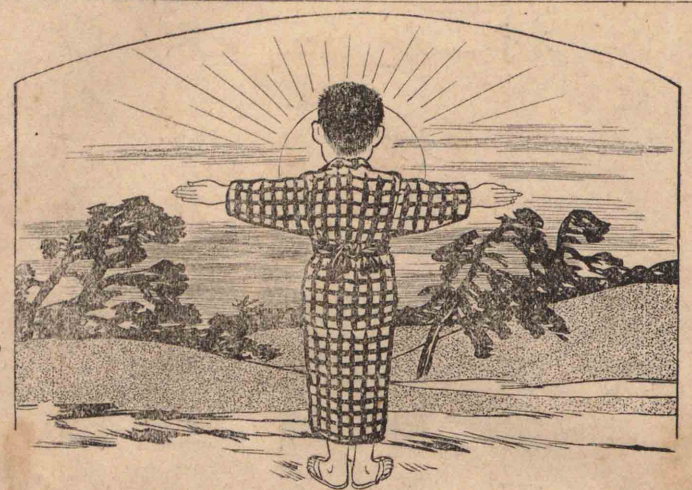
父母

ふた　を　おあけ　なさいます　な。」
と　いつて、きれいな　箱　を　わたしました。
うらしま　は　玉手箱　を　もらつて、又　か
め　の　せ中　に　のつて、海　の　上　へ　出
て　きました。
うち　へ　かへつて　みる　と、おどろきました、
父も　母も　しんで　しまつて、うち　も　な
くなつて　ゐて、村　の　やうす　も　すつかり

かはつて　ゐます。しつて　ゐる　ものは　一人も　ありません。かなしくて　かなしくて　たまりません　から、おとひめ　の　いつた　ことも　わすれて、玉手箱　を　あけました。あけると、箱　の　中　から　白い　けむり　が　ぱつと　出て、うらしま　は　たちまち　白が　の　おぢいさん　に　なつて　しまひました。

十五　四方

東　西　南　北



日ノ出ル方ガ東デ、日ノハイル方ガ西デス。

東ヘムイテ　リヤウ手ヲヒロゲルト、右ノ手ノ方ガ南デ、左ノ手ノ方ガ北デス。

東西南北ヲ四方ト　イヒマス。

學校

家

字

十六 私ノ村

學校ノ北ニ小高イヨカガアリマス。ヨカノ上ニ天シンサマノオミヤガアリマス。ソコヘ上ルト、私ノ村ハ一目ニ見エマス。

村ノ中デ、一バン目ダツノハ私ドモノ學校デス。大キナ家ガ三ムネ、「コ」ノ字ナリニタツテヰマス。學校

新

新

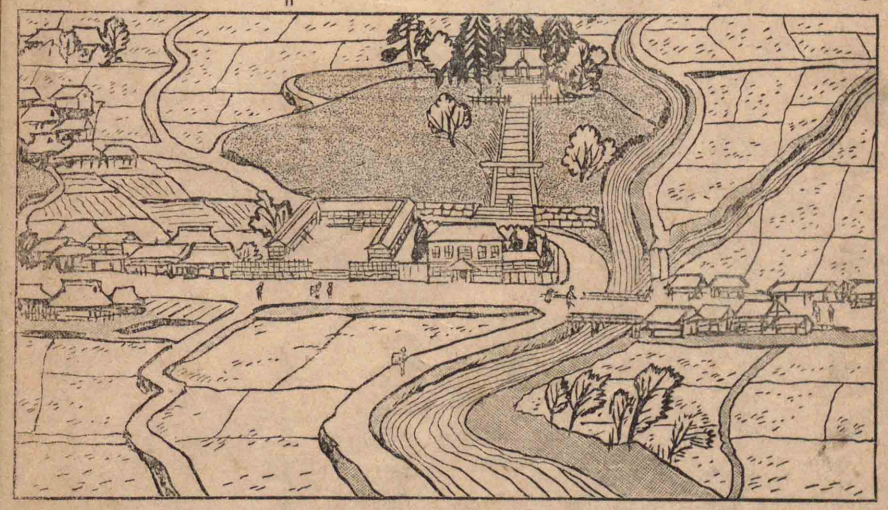
ノ東ドナリニニカイヅクリノヤクバガアリマス。

ヤクバノヨコデ、川ガニツオチアツテ、マガリクネツテ、南ノ方ヘナガレテイキマス。

キヨネンデキ上ツタ新道ハ、村ヲ東カラ西ヘ、マツスグニツキヌイテヰマス。新道ノリヤウガハニハ、新シイ家

今

ガ七八ケンデキマシタ。ソノ中ニハ、ニウリヤモアリマス。今ソノミセノマヘニ二車ガトマリマシタ。車ヲヒイテキタ人ガベンタウデモタベルノデセウ。



青

ツイコノアヒダノウエタ田ガ、モウアンナニ青クナリマシタ。ドコカヲカノ下デ、ニハトリガナキマス。モウオヒルニナツタノデセウ。オ寺ノカネモナリ出シマシタ。

寺

十七 一口ばなし

星

子どもがそら一めんの星を見て、

光　何

「ああ　わかつた。あの　光る　ところ　が　雨の　ふる　あな　だ。」

二　星とり

「おい、長い　さを　を　ふりまはして、何を　してゐる　の　だ。」

「星　を　二つ　三つ　はたきおとさ　うとしてゐ

弟　兄

る　の　だ。」

「ばかな　こと　を　いふ。そんな　ところ　で　とどく　もの　か。やね　へ　上つて　はたけ。」

三　星　の　かず

ある　ばん、弟　が　には　へ　出て、「一つ　二つ」と　かぞへて　ゐました。兄　が　「おまへ、何　を　かぞへて　ゐる　の　だ。」と　たづねます　と、

書

弟「星を　かぞへて　ゐます。」

兄「こんな　くらい　ばんに　かぞへない　で、ひる　かぞへる　が　よい。」

十八　をのの　たうふう

むかし　をのの　たうふう　と　いふ　人　が　ありました。わかい　とき　字　を　ならひました　が、うまく　書けません　ので、こまつて　ゐました。

池　虫

ある　とき、雨　の　ふる　日　に、たうふう　が　には　へ　出て、池　の　はた　を　通ります　と、しだれやなぎ　の　えだ　へ、かへる　が　とびつかう　として　ゐます。かへる　は　やなぎ　の　つゆ　を　虫　と　でも　おもつた　のでせう、とんで　は　おち、とんで　は　おち、何べん　も　何べん　も　とびつかう　と　します。だんだん　高く　とべ

る　やう　に　なつて、　とうとう　やなぎ　に
とびつきました。
たうふう　は　これ　を　見て、　この　かへるの　やうに、　こんきが　よければ、　何ごとも　できない　ことは　ない　と　さとりました。

名　　前

それ　から　は　一しやうけんめいに　なつて、
毎日　字　を　ならひました。ずんずん　手が
上つて、　のちには　名高い　書手　と　なりました。

十九　セミ

ニハ　ノ　モモ　ノ　木　ノ　ネモト　カラ、　カラ　ヲ　キタ　セミ　ガ　ハヒ上ツテ　キマス。
チヤウド・　私　ノ　目　ノ　前　デ　トマツテ、

色　來

カラヲ ヌギハジメマシタ。

マモナク ヌイデ シマヒマシタ。 アブラゼミデス。色ガ ウスクテ、ヌレテ ヰル ヤウニ 見エマス。見テ ヰル ウチニ、チヂンデ ヰタ ハネモ ダンダン ノビテ、色モシダイニ コク ナツテ キマシタ。

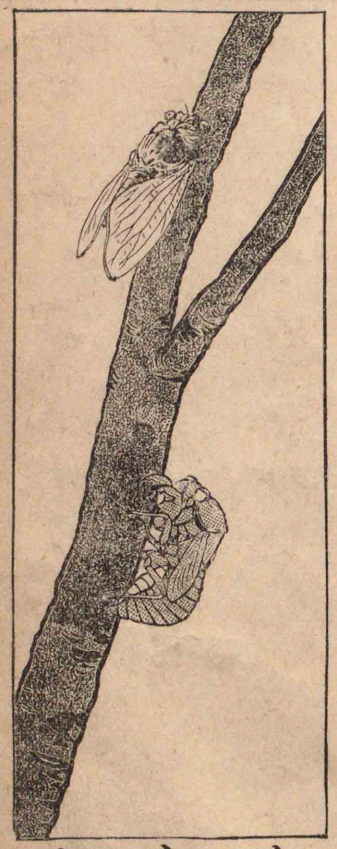
スコシ タツテ カラ 又 來テ 見マスト、モウ リツパニ セミニ ナツテ ヰマス。

行

コノ 大キナ モノガ、ヨク アノ カラノ中ニ ハイツテ ヰタ モノダト オモヒマシタ。

ツカマヘヨウト シテ 手ヲ 出シマスト、「ジイツ」ト ナイテ、トンデ 行キマシタ。

今ニハノ木ニ セミガ ウルサイ



風

三郎 今日

ホド ナイテ 井マス。アノ セミ モ コノ
中ニ 井ル ノ デセウ。

二十 さき舟

日の光がやはらかにさして、小川の
水はきれいにすきとほつてゐます。風
がしづかにふいて來て、きしのささ
がさらさらとおとをたてています。
二郎「三郎さん、又今日も舟をなが

男人

して あそびませう。」
三郎「又はしりくらをさせませう。五郎
さんもなかまにおはいりなさい。」
みよ子「私はかちまけを見る人になり
ませう。」
男の子 三人はささのはをとつて、
舟をこしらへました。
みよ子はささの小えだを手にも

つて、土ばしの上にたゝちました。

みよ子「さあ、私がこゑをかけましたら、みなさん一しよに舟を出すのですよ。一、二、三」。

三人は一しよに舟を出しました。舟は風に

ゆられながら、土ばしの方へながれて行きます。三人は舟とならんで、川のふちをかけて行きます。草のはにとまつてゐたてふがおどろいてとびたちました。

近

みよ子「あら、てふてふが五郎さんの舟に とまりました。」

舟は だんだん土ばしへ 近くなります。

五郎「ほうら、もう だぎき しようぶ だ。」

みよ子は さつと ささの小えだを 上げて、

「ばんがち、五郎さんの舟。」

二郎「五郎さん ばんざい。」

三郎「五郎さん ばんざい。」

みよ子「五郎さんの舟には、てふてふのせんどうさんが のつたから、かつたのでせう。もう一どやつてごらんなさい。」

二十一　水デツパウ

私ノウチヘキノフヲケヤガ來テ、

手ヲケヤタラヒノタガヲカケカヘマシタ。アトヘ竹ノキレヲノコシテ行キマシタガ、ソノ中ニフシガ一ツアツテ、水デッパウニナリサウナノガアリマシタ。

私ハソレヲヒロツテ、フシノマン中ニ、キリデ小サナアナヲアケマシタ。ソレカラホソイ竹ヲエニシ

テ、ソノサキニキレヲマキツケテ、センヲコシラヘマシタ。

池ノ水デタメシテミルト、ウマク出來テ井テ、高ク上ゲルト、ヤネノ上マデトドキマス。

ウレシクテタマリマセンノデ、ニハニ水ヲウツタリ、ウエ木ニ水ヲカケタリシマシタ。

ソノウチニ水ガ出ナクナッタノデ、センヲヌイテ見ルト、キレガトレテ水ヲマキナホシテ、コンドハヨウトオモッテ、ジヨウロノカハリニシフニアナヲタ。

クサンアケマシタ。サウシテヤッテミマシタガ、ドウシテモ水ガウマク出マセン。コマッテニイサンニ見テモラヒマシタラ、

「コンナニタクサンアケルナラ、アナヲモット小サクシナケレバダメダ。ソノウチニニイサンガコシラヘテヤラウ。」トイフコトデシタ。

二十二　虫ぼし

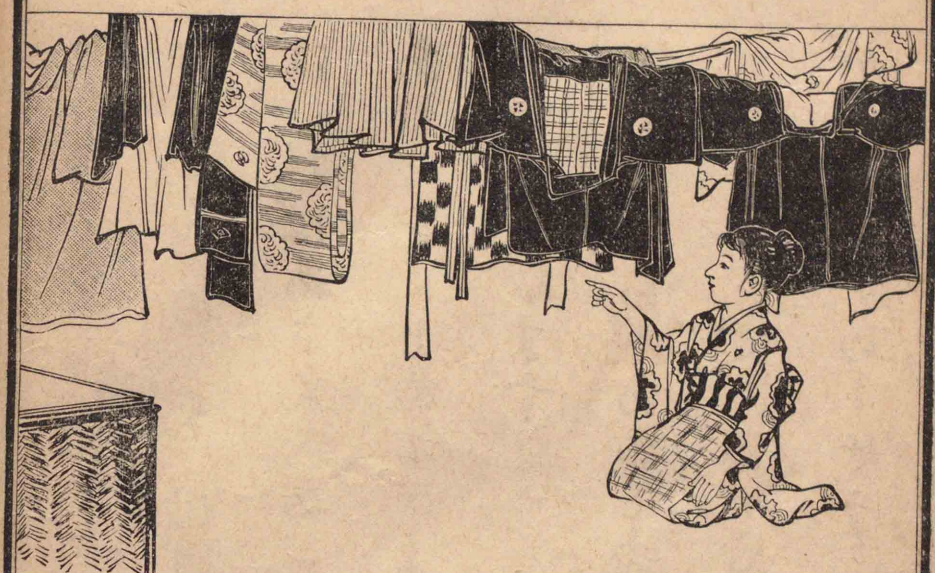
今日は　うちの　虫ぼし　です。たんすや
つづら　から　着物　を　出して、風通しの
よい　ところ　に　かけて　あります。
この　黒い　もめんの　もんつき　は　私の
です。その　となりの　五つもんの　はお
りと　しまの　はかま　は　おとうさんの
です。

着物
黒

そちらの　はばの　廣い　光る　おび　は
ねえさんの　で、はばの　せまい　黒いの
は　おばあさんの　です。おばあさんは
あれを　しめて、よく　お寺まゐりに い
らつしやいます。
それから、あの　赤い　じゆばん　は　ねえ
さんの　で、ねずみ色の　もんつき　は　お
かあさんの　です。

廣
赤

祭



こちらのかすりのつつそでは太郎のあはせで、そのとなりのもすりんのあはせは私のです。私どもはあれを着て、をばさんの村のお祭によばれて

行くのです。

二十三　カウモリ

ムカシ鳥トケダモノガケンクワヲシタコトガアリマス。ソノトキカウモリハ「私ハ鳥デモケダモノデモナイカラ」。トイツテ、ドチラヘモツキマセンデ

中

シタ。

ソノ中ニケダモノガカチサウニナツタノデ、

「私ハカラダガネズミニニテヰルカラ、ケダモノダ」ト イツテ、ケダモノノミカタニナリマシタ。

スコシタツテ、コンドハ鳥ガカチサウニナリマシタ。

羽

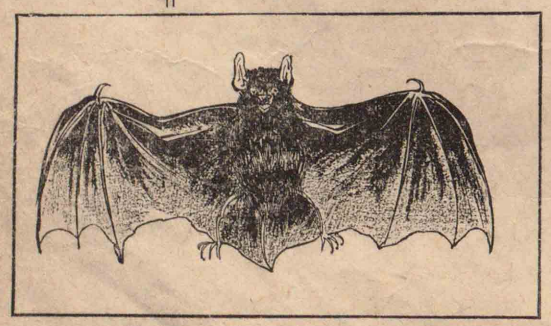
時

ウニナリマシタ。スルト カウモリハ

「私ハ羽ガアルカラ、鳥ダ」

ト イツテ、鳥ノ方ニツキマシタ。

イツマデタツテモショウブガツカナイノデ、中ナホリヲシマシタ。ソノ時カウモリガケダモノノ方ヘ行キマスト、



空

「オ前ハ鳥デハナイカ。」
トイツテ、ナカマヘ入レテクレマセン。
又鳥ノ方ヘ行キマスト、
「オ前ハケダモノダラウ。」
トイツテ、アヒテニシマセン。
ソコデカウモリハシカタナシニ、ヒルハ木ノウロヤアナノ中ニカクレテ、ヤテクラクナツテカラ空

夕方

ヲトビマハルヤウニナツタトイヒマス。

二十四　十五や

十五やの月がざしきのまん中までさしてゐます。
夕はんがすむと、うちのものはみんなえんがはへ出ました。えんがはには、夕方からいもやだんごをつく

雲　上　吹

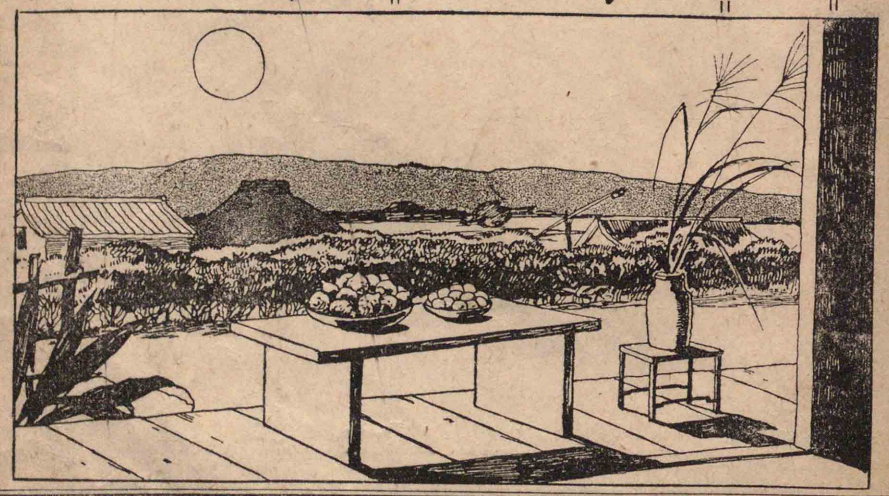
ゐ　に　のせて、お月さま　に　そなへて　あります。今日　私　が　川　の　土手　から　とつて　來た　すすき　も、花いけ　に　さして　そなへて　あります。

空　は　水　の　やう　に　すみきつて、雲　一つ　ありません。

だれ　か　川上　の　方　で、さきほど　から　ふえ　を　吹いて　ゐます。

來

時時　すずしい　風　が　吹いて　來る　と、おもひ出し　た　やう　に　くつわ虫　が　なきます。おばあさん　が　「ふみ子　も　こんや　は　きつと　あちら　で　この　月　を　見て　ゐませう。」と、ひとりごと　の　やう　に

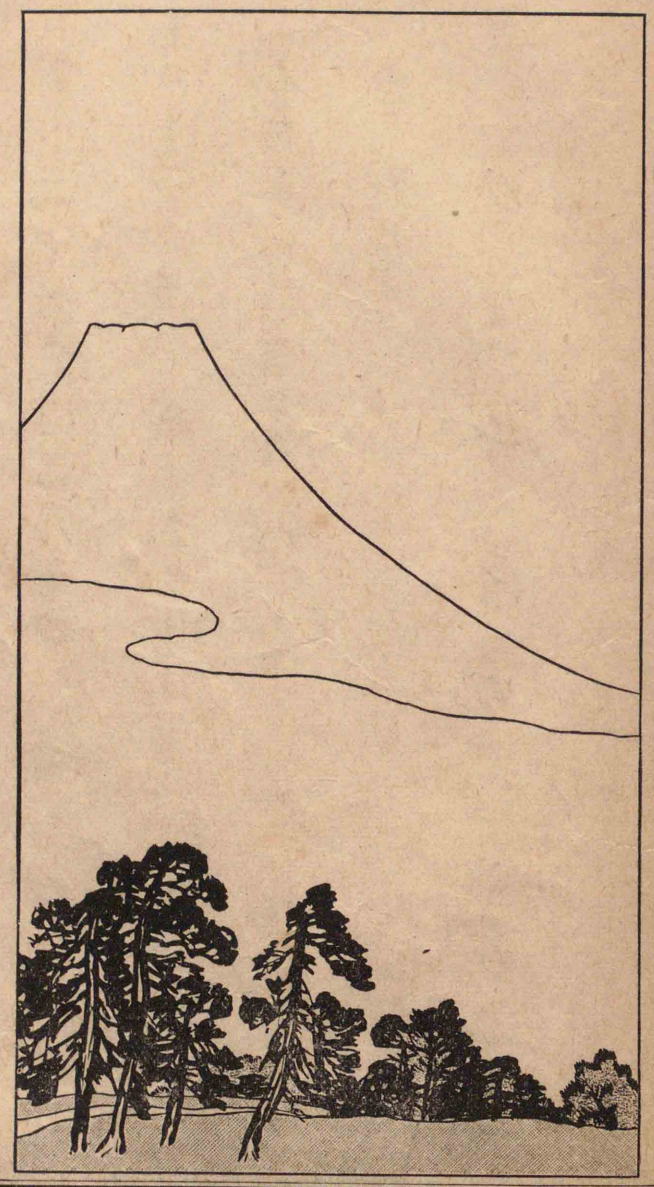


遠

おつしやいました。ねえさんは遠いところへおよめにゆつていらつしやるのです。

二十五　ふじの山

あたまを雲の上に出し、
四方の山を見おろして、
かみなりさまを下にきく、
ふじは日本一の山。



青空　高く　そびえたち、
からだに　ゆきの　着物　着て、

かすみ　の　すそ　を　遠く　ひく、
ふじ　は　日本一　の　山。

二十六　はごろも

むかし　一人　の　れふし　が
「今日　は　まあ、何　と　いふ　よい　お天
き　だらう。」
と　いひ　ながら、みほ　の　松原　を　通り
ました。

松原

日　は　よく　てつて　ゐて、ふじ　の　山　は
いつも　より　なほ　きれいに　見えました。
風　は　しづか　で、なみ　も　おと　を　た
てません。おき　の　方　は　かすんで、空　と
水　が　一つ　に　なつて　見えます。
あまり　けしき　が　よい　ので、れふし　が
ぼんやりと　海　を　ながめて　ゐました。ど
こ　から　か　よい　にほひ　が　して　來ま

美

女

すので、見上げますと、松の木に美しい物がかかつてゐました。そばへよつて見ますと、見たこともないきれいな着物でした。

「これはよい物がある。ひろつて家のたからにしよう。」

といつて、持つてかへらうとしますと、見たこともない美しい女が來ました。

た。

「それは私の着物でございます。」

「いや、これは私が今ここでひろつたのです。持つてかへつて家のたからにします。」

「いや、それは天人のはごろもといふ物で、人げんにはようのないものです。」

「天人の はごろも なら、なほさら かへすことは 出來ません。國の、たからにいたします。」

「それが なくては、天へ かへることが 出來ません。どうぞ おかへし 下さいませ。」

れふしは かへしません でした。天人は しをしをと して、なみだに うるむ 目で

空を 見上げました。

れふしは きのどくに なりまして、

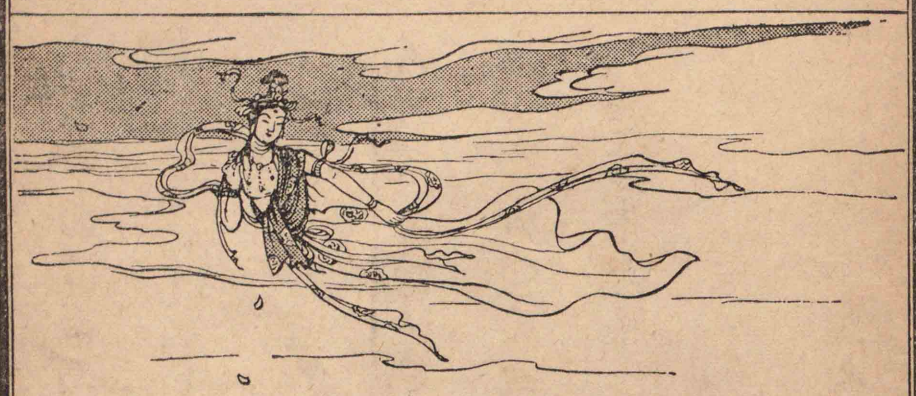
「あまり おかはいさう ですから、おかへし申します。その かはりに 天人の まひと いふ もの を お見せ 下さいませ。」

「おかげで 天へ かへる ことが 出來ます。おれいに まひを まひませう。

上

その　はごろも　を
おかへし　下さいま
せ。」
「いやいや、おかへし申
したら、まはずに　空
へ　お上りに　なりま
せう。」
「いいや、天人　は　うそ

袖



を　いひません。」
「ああ、はづかしい　こと　を
申しました。」
れふしが　はごろも　を　か
へします　と、天人　は　そ
れ　を　着て、まひはじめま
した。はごろも　の　袖　は
かるく　風　に　まひ、はご

ろもの色は日の光にかがやきました。れふしが見とれてゐますと、天人はまひながら松原の上をだんだん高く上つて、ふじの山よりも高い大空のかすみの中へはいつて行きました。

をはり

昭和三年十月十日翻刻印刷
昭和四年一月廿八日翻刻發行

尋常小學國語讀本卷三
臨時定價　金拾錢

著作權所有

著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社
代表者　石川正作

印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社工場

發賣所　東京市麹町區飯田町一丁目三番地　株式會社國定教科書共同販賣所

昭和三年十月十二日
文部省檢査濟

第二學年

須磨

広島大学図書
2500032326